復活節第３主日礼拝　説教「わたしは良い羊飼いである」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会　2018 年 4 月 15 日

エゼキエル書 34 章 7～15 節　ヨハネによる福音書 10 章 7～18 節

皆さんのお手元の週報には、必ず翌週の礼拝予告が記載されておりますが、私が知る限り、これは、どこの教会でも行っていることです。 主の日の備えとして、その日の聖書箇所に予め目を通し、礼拝に出席されることを願ってのことです。ですから、そうした方が多くいらっしゃることは、礼拝に備える上での牧師の励みともなります。それは、牧師の説教がどれほどつたないものであったとしても、御言葉自体がそこで生き生きと語りかけられることになるからです。それゆえ、時に不思議なことが起こります。私自身、語ることのなかった、しかし、大事な聖書のメッセージが、しっかりと伝わっていることがあるのです。このことは、聖霊の働きゆえのこととしか思えせんし、まただから、礼拝において主が生き生きと働きたもう事を知らされ、牧師も励まされもするわけですが、ですから、皆さんの何気ない一言に、牧師も励まされることが多いのはそのためです。

ただ、牧師がこのようなことを申しますと、聞く人によっては、言い分けがましく聞こえるのかもしれません。自らの不作為、不勉強をある意味で皆さんに負わせるようなものだからです。従って、そのような意図もって、私が牧師として立っているとしたら、私は、何一つ皆さんの期待や希望に応えていない牧師ということになりましょう。ですから、そういう意味では、この日、語られている御言葉は、私自身への反省を促すためのものであるとも言えるのでしょう。ですから、これは弱ったということにもなるのですが、ただ、そんなことは百も承知の皆さんから、批判的な意味合いをもって、それぞれの御言葉を投げつけられたことは、これまでただ一度としてありません。それは、皆さんが、牧師だけが御言葉の責任を負うてはいないことをよくご存じであるからです。そして、このことはまた、皆さんが、その視野をもう少し広げて、今日の御言葉全体を見ていただければ明らかなことです。それは、御言葉が、ある特別な人だけに語られているものではないからです。礼拝に集うすべての者が互いに聞いていくものが御言葉であり、そうである以上、説教もまた、共に作り上げられるべきものでもあるのです。

さて、そこで、早速御言葉に聞いて参りたいと思いますが、エゼキエル書にあることも、また、主イエスが仰ることも、それぞれに共通していることは、羊の群れを導く牧者、羊飼いについてのことです。そして、これについては、今もホットな話題として、羊の群れの中で語られ続けていることでもあります。あそこの先生は、家の先生はと、信徒同士で交わされるそんな会話をよく耳にすることがあるからです。従って、牧者、羊飼いの問題は、古くて新しい問題でもあり、しかも、それが今も続いていると言うことはつまり、有り体に申せば、坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、ということが、教会の中でも常にあり続けているということです。では、そのために牧師はどうすればいいのか。いい先生と言われるために精進を怠らないということが常々求められもするのでしょうが、それが、説教ということなのでしょうか。

ところで、皆さんは、「百姓殺すにゃ刃物はいらぬ、雨の三日も降ればよし」という都々逸をご存じでしょうか。按手を受けた直後の私の牧師就任式の際、ある先輩牧師が、教会の皆さんへの挨拶として、これになぞらえ、次のように仰ったのですが、それは、「牧師殺すにゃ刃物はいらぬ、三度礼拝休めばよし」とい

うものでした。そして、それに続けて、こう仰ったのです。「皆さん、休まずに礼拝に出てくださいね。よろしくお願いします」と。私は、その時のことを今でも忘れることができないのですが、それは、その先輩牧師がその短い挨拶に込められたことの意味を、様々な機会を共にする中で、学ばせていただいたからです。

私の牧師就任式で語られたその短い挨拶は、牧師である私に向かってのものであると同時に、教会の皆さんに対してのものでもありました。そして、そこで、その先生が言いたかったことは、「死にたくないなら、説教に精進せよ」という、通り一遍のものではありませんでした。先ほどの都々逸の後で、「皆さん、礼拝には休まずに来てくださいね」と、信徒の皆さんに呼びかけたように、３回礼拝に出席しないということは、皆さんにとって、どういうことなのでしょうか。信仰者にとってそれは、死活問題ともなりかねないものだということです。飢え死にせずとも、体が弱ってしまうということでしょうし、何よりも、三週間、その音沙汰すら分からなければ、家族であれば、捜索願を出さないわけには行かないということです。ですから、それで狼にでも襲われようものなら、群れはがたがたです。そうなると、エゼキエル書にあるように、羊飼いも生きていくことはできません。共に一つの群れの中で生きている以上、ダメになるときも一緒だということです。つまり、このような関係性に生きているのが、こうして羊の門を通った、主の教会に生きる私たちであるということです。ですから、教会に生きているということは、そういうものなんだということを、その牧師先生は、その短いその挨拶の中で、教会に生きる私たちのその姿を的確に語ってくれたわけであり、また、それは、この日の御言葉が語っていることも同じです。

牧師と信徒の関係性をどう捉えるべきか、信徒と信徒との関係性をどう捉えるべきかは、御言葉に聞いていく限り、それほど難しいことではありません。ここでイエス様も仰っているように、同じように共々に羊の門をくぐったのが、私たちだからです。けれども、それが時に難しさを孕むことがある。それは、私たちが、教会、群れと言うことを抜きにして、自分の考えや思いにいつまでも拘ってしまうからです。けれども、ある一つの事柄をすべての人が同じように受け止めるわけではありません。牧師の説教の評価が二分するように、説教一つ取ってみてもそうです。いいという者もいれば、嫌、そうではないという者もいる。また、説教はいいんだけど、でもね、ということもあれば、その反対に、説教はどうもね、でも人柄はね、という場合もある。それぞれに個性があり、持っているものも同じではないわけですから当然です。それに、人それぞれ好みの違いも大きいわけです。また、それだけに牧師も信徒も、思うに任せないところに立たされ、時に苛立ちを募らせていくことにもなるわけです。牧師は、説教のことを言われますと何も言い返せませんので、だから、多くの牧師たちは、説教のために格闘することにもなるわけです。そんな中で、先ほどから紹介している先輩牧師が、悩む私に語ってくれたことは、「牧師の説教は、お母さんの作ってくれたご飯なんだよ。一流レストランのご飯なんて、三度三度毎日食べられたものではないよ」ということでした。そして、こうも仰ったのです。「母親の作ってくれたものが全部美味しかったわけではないだろう。でも、それでも人は大きくなっていく。そういうものなんだよ」ということでした。

あって七癖と言われるように、なかなか拘りを捨て去ることができないのが、私たちであり、また、そういう人間が集められている以上、教会も、世間にある人の集まりと大して変わりは無いように思います。そして、教会において厄介なことは、集められている人と人との間に御言葉が置かれているということです。だから、それぞれの思いだけを互いにぶ

つけ合うだけで終わらず、最後は、投げる物がなくなって、御言葉までお互いにぶつけ合うことにもなるのです。ですから、そういうところに、わざわざ入りたいと思う人はおりません。まただから、関係が薄まらず、余計に煮詰まっていき、気がついたら、鍋の底には何もないということにもなりかねないわけです。そこで、まただからこその信仰だろうとの意見もあるのでしょう。では、そこで問われる信仰とは、どういうものなのでしょうか。いずれの優劣を決めることでないのは明らかです。もちろん、ただ問題を先送りするだけの無責任な態度を、私たちは信仰と呼んでいるわけでもありません。そのようなとき、信仰者である私たちに問われていることは、御言葉を互いに投げつけ合い、罵り合うその姿を、主イエスはどのように見つめておられるのかと、この一点にお互いの思いを傾けることができるかどうかです。まただから、そこで、私たちは知るのです。その傍らにそれでも離れずに共にいてくださる主イエスを、です。

かつて公会議と言われる会議が、聖職者の罵り合い、時に殴り合いの様相を呈したと言われているように、今日の正統的信仰が、そうした戦いなのか、争いなのかは分かりませんが、そういう中で確定するに至ったのは、意義深いことだと思います。そして、何よりも先ず、今私たちがこうして手にしている聖書にも同じことが言えるのです。聖書が、私たちが今手にしている形で一つに纏められるに至ったのは、主イエスの出来事から400 年くらい後のことでありました。それは、それだけの時間を必要としたからでもありますが、このことはつまり、それだけ手間がかかったということであり、同時に、そこには、加えられなかった文書がいくつもあったということです。つまり、一つに纏められるには、想像を超えたせめぎ合いがあったということです。けれども、今私たちは、聖書として一つのまとまった書物から神の言葉を聞くことが許され、また、この一つの書物を大事に、それこそ、後生大事に今日まで受け継いできたのが教会でもありました。それは、主の群れである私たちと、主イエスが離れることなく共にいてくださり、聖霊の働きをもって導いてくださったからです。

従って、信仰とは、私たちがそのように働いている神様の御心の中にすっぽりと収まっていることであり、そして、教会にそれが許されたのは、正論だけを吐く、声の大きい強い人が多かったからではありません。正論はなくてはならないものですが、どうしてそれが正論なのかはよく分かっていなければなりません。ただ、それが分からないまま自らの正当性だけを主張することは、みっともないだけのものです。そして、そういうところを通ってきたのが、私たちがこうして繋がっている主の教会なのであり、従って、神ではない私たちがこうして連なる教会の姿というものは、今も昔も、それほど変わらないものなのかも知れません。ですから、これはとっても有り難いことです。愚にもつかない私たちのみっともない有様の中に、主イエスだけは、間違いなく共にいてくださっていると、そう信じることができるからです。従って、解決つかないような困難な状況の中で、信仰者である私たちにとって大切なことは、わけも分からずに正論を吐くことではありません。共にいます主イエスに我が身を預け委ねることができるということです。羊の門を通り、主の教会にこうして生きている私たちに許されていることはこのことであり、だから、羊はてんでんバラバラ好き勝手なところに向かうことなく、主イエスが「羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れとなる」と仰るように、様々ありながらも、主の教会が教会である以上、一つの群れとして、今日を迎えることになったのです。

みくに幼稚園では、誰誰ちゃんが、と泣き叫ぶ声が時折聞かれますが、子どもの成長にとって、時に争うことも必要な

のは、皆さんもよくご存じのことでしょう。なくて七癖と言われている私たち人間にとって、ぶつかり合いは避けられないものだからです。そして、そこで、その私たちが成長へと促されるのは、そのままでは終わらないし、終われないからです。教会附属幼稚園の子供たちが教えてくれているように、一つの群れとして生きる私たちも、それは同じです。ぶつかり合いつつも、私たちが互いに拘りを引っ込め、成長へと促されるのは、一つであることを忘れず、一つであるために歩もうとするからです。まただから、それぞれの祈りの中に主イエスを見つめることが互いに許され、そこで、自らのその浅ましさ、醜さ、至らなさを思い知らされたとしても、なお、その上で、主イエスの柔和な眼差しを知らされ、互いに互いを赦し合い、受け入れ合うことができるのです。そして、それが、羊の門を通った私たちだということです。従って、この、それぞれが主の赦しの中に置かれ、一つの群れに生きている事へのこの気づきが、教会という神の家族においては、何か事ある度毎にものを言うことになるわけです。

羊の門をくぐった私たちに向かい、主は「私はよい羊飼いである」と仰ってくださっています。このことはつまり、私たちのために拘りを捨て、神様が与えられたその原則に徹した主が、羊の門の中に生きる私たち一人一人に向かって、その姿を御言葉を通しはっきりと示してくださっているということです。そして、その私たちでありますが、それは、主イエスが「私は命を再び受けるために、捨てる。それゆえ、父は私を愛してくださる。誰も私から命を奪い取ることはできない」と仰るように、牧師も信徒も、拘りを捨て去った主イエスにとっては、大切な一人一人であるということです。それを生涯を通し知らされているのが私たちであり、その聞き分けの悪い私たちとその生涯を共にしてくださっているのが、私たちの羊飼いであり大牧者である主イエス･キリストというお方なのです。従って、私たちの信仰とは、「わたしはよい羊飼いである」と仰る主イエスの中にそれぞれの収まりを見出すものであるということです。

主というこの言葉の中に自分自身の収まりを見出すこと、収まりきれなくなってもなお収まっているということを見失わずに歩むこと、それが私たちの信仰を形作るのですが、このことはつまり、私たちが顔を曇らせ、その顔を歪ませようが、あるいは、手放しで喜び踊り、大騒ぎしようが、私たちの生涯を通じて共にいてくださる方が主イエスであるからこそ、必ず果たされるものでもあるということです。ですから、この変わらぬ現実に、私たちが立ち帰ればこそ、私たちの信仰は信仰とされていくのです。そして、それは、主の命でもある私たちのことを脅かすものは何もないからです。主の教会という大きな枠組みの中に置かれているから，もう安心、もう大丈夫だと、そして、それが私たちの人生という少し長いけど、でも短いその生涯の中で、実際に，誰もが経験するから、だから、その点がしっかりと収まっているところで、主の慰めと恵みがまた豊かに与えられることにもなるのです。

ところで、できるだけ短い説教を、というのが、皆さんのたっての願いであると常々伺っておりますが、今日も、その願いに応えることはできませんでした。ですから、それについては、申し訳ありませんでした。でも、来週こそは、そのご期待にお応えできるように、どうぞお祈りください。主にある兄弟姉妹がこうして集う、主の教会のために祈る皆さまの祈りによって、主の教会がより豊かなものとされていくのは間違いのないことだからです。では、ご一緒に祈りを献げましょう。

祈り